

## 明代の中国 ～東西文化交流～

### 今回学ぶこと

モンゴル帝国がユーラシアをめぐる人と物の行き来を盛んにしたあとを受けて、中国で成立した明朝は、朝貢と呼ばれる仕組みで他の国々との関係をもった。中国皇帝と諸国の君主とのあいだの上下関係に基づいて、朝貢貿易が行われた。15世紀初頭の永楽帝は、鄭和に命じて東南アジアやインド洋沿岸の諸国へ大艦隊を率いて赴かせ、朝貢することを促した。日本とのあいだでも足利義満が貿易を行った。17世紀には西洋の宣教師が中国に來訪し、西洋の科学の知識を伝え、中国の文化をヨーロッパに紹介した。

#### 調べておこう・覚えておこう

- 朝貢の仕組みについて、整理してみよう。
- 足利義満はなぜ中国に朝貢しようと考えたのか、政治、経済、文化の3つの視点から整理してみよう。
- 中国で布教しようとした宣教師が、中国にもたらした知識は何だったのだろうか。具体的な事柄をまとめてみよう。

### 明の対外政策

商業に支えられた元朝が財政的に行き詰まるなかで、紅巾の乱と呼ばれる農民反乱が起きた。反乱の指導者だった朱元璋は明朝を建てると、現物と労働力を直接に人民から徴収する仕組みをつくる。農村では里甲という組織を編成し、生産物を国庫に納付させた。海外との貿易も、朝貢による貿易に限定し、民間の商人が勝手に外国と交易することを許さなかった。第三代皇帝の永楽帝は、朝貢する国を増やすために、鄭和に大艦隊を率いさせて南シナ海とインド洋沿岸の国々とのあいだに、明朝にとって望ましい国際秩序をつくろうとした。鄭和の訪れた国々からは、明朝の都に朝貢に来る使節が相次いだ。



## 明と日本の交流

元朝は交鈔<sup>こうしやう</sup>とよばれる紙幣を流通させるために、宋代に広く使われていた銅銭の使用を一時、禁止した。こうした背景のもと、使われなくなった大量の銅銭が、日本に向かう貿易船に積まれ、日本にもたらされた。日本では14世紀なかば以降に、貨幣経済が行き渡り、銅銭が経済を支えるために必要となる。

同じころ、現在の長崎県の沿海地域に拠点を持った人々が船に乗り込み、朝鮮半島や中国の山東半島などで「倭寇<sup>わこウ</sup>」と呼ばれる海賊として横行した。明朝は日本の国王に、倭寇の取り締まりを期待したが、南北朝の戦乱のなかで国王が誰なのか、はっきりとしなかった。室町幕府第三代将軍となった足利義満は、戦乱を終息させると、銅銭などを輸入して財政をしっかりとしたものとし、中国の美術工芸品を入手して権威を高めるなどの目的をもって使節を送り、永楽帝から日本国王として認められた。明朝は勘合という貿易許可書を日本に渡し、勘合貿易と呼ばれる交易が行われるようになった。

## 宣教師の来訪

16世紀になると、アジアの貿易で利益を上げようとポルトガル商人がシナ海に現れる。それとともにヨーロッパからキリスト教を布教するために、フランシスコ・ザビエルなどの宣教師が来訪するようになった。中国での布教はなかなか進まなかったが、イタリア出身のイエズス会のマテオ・リッチは、苦勞の末に北京に足を踏み入れることができた。

リッチは徐光啓<sup>じよこうけい</sup>などの中国の知識人とも交流を深め、ユークリッド幾何学を漢文に翻訳したり、坤輿万国全図とよばれる世界地図の作成にかかわったりした。一方、宣教師たちは中国の科举制度など、中国の制度や文化をヨーロッパに紹介した。